

後継牛を確保するために

前回の12月号では、子牛の寒冷対策について記しました。今回は、育成管理の重要性について深めていこうと思います。

1 後継牛を確保するには

本来あるべき後継牛は確保されていますか？また、牛の頭数を多く飼って、労働負担になっていませんか？密飼いは生産性が上がらないばかりか、喰い負けに起因する疾病が増加するなどの弊害が生じます。

表 1. 牛群規模の維持に必要な更新牛頭数の初産月齢と更新率による違い

初産月齢 更新率(%)	22	24	26	28	30	32
20	40	44	48	51	55	59
22	44	48	52	56	61	65
24	48	53	57	62	66	70
26	52	57	62	67	72	76
28	56	62	67	72	77	82
30	61	66	72	77	83	88
32	65	70	76	82	88	94
34	69	75	81	87	91	100

*100頭規模

(Menzi 1987)

*死亡・淘汰率10%

初産分娩月齢が26ヶ月で更新率が28%の場合、牛群を維持するのに必要な育成牛は67頭ですが、初産分娩月齢を2ヶ月短縮して24ヶ月にすると62頭となります。5頭少なく管理できる、または5頭を初妊牛として販売できることとなります(表1)。

- ①目標とする授精月齢が決まっていない
- ②発情の見逃し
- ③発育不全
- ④出生時、授精月に起因する季節差

図 1. 分娩月齢がばらつく要因

これらの原因の多くは、育成牛の管理が不十分であると言えます。出生から授精までの各段階で、栄養・群管理・施設・環境などの観点から鑑み、課題がどこにある

かを見つけ出し、その課題の改善に向けた取り組みを行う必要があります。

2 健康な子牛を産ませる

元気な雌子牛が産まれることは、大きな喜びでしょう。将来的な資産となります。いかに殺さず、健康に育てていくことが重要で、そのために母牛へワクチンを接種したりする対策をとられる農業者も多くなっています。

しかし、増頭化が進み、施設が手狭となっている農場では、事故率が高くなってしまいうようです。特に『母牛をどこで分娩させるか』が、ポイントとなります。

分娩時にスタンションに繋ぐ方は、母牛の事故が多く、初妊牛は寝起きができず腰抜けから4胃変位を発症してしまうことは少なくありません。また、栄養管理のミスマッチによって、過肥による難産となるケースも多くみられます。未然に防ぐには、次のことが挙げられます(図2)。

これらのことを改めて見直すことで、健康な子牛が産まれ、母牛も事故から守れることとなります。



- ① 乾乳期の管理(運動・栄養)
- ② 分娩場所の確保(繋留しないで産ます)
- ③ できるだけ分娩介助は行わない
- ④ 分娩後の処置

図 2. 分娩事故を防ぐには

もに、母牛の管理に重点を置くことが、将来の基盤となるものと考えます。